



ツバルプロジェクト

～ツバル国文化調査と環境問題への挑戦～

<現地調査計画書>

横浜市立大学探検部

email:ycu_tanken@hotmail.com

目次

1. 趣旨	1
2. ツバル(Tuvalu)という国.....	2
◆ツバルとは.....	2
基本データ（2001年）	3
略史	3
気候	3
◆ツバルが抱える問題	4
地球温暖化とツバル	4
人口過密・移住問題	5
ゴミ・汚水処理問題	6
3. 現地調査	8
◆調査日程	8
◆調査項目	9
【環境】	10
温暖化が与える影響と政府、人々の意識.....	10
南の島ツバルがゴミの島に！？　－ゴミ・汚水の処理問題－	10
【政治経済】	11
スッパ抜き！？　－ツバルの政治・経済－	11
人口過密、失業問題について.....	12
ツバルっ子がゆく　－ツバルの教育－	12
【歴史】	13
ツバル、人と国.....	13
4・23事件　－ツバルの歴史－	13
信仰と伝説.....	14
ツバルの伝統舞踊、楽器、歌.....	14
【生活】	15
ツバルの医療について	15
衣服について.....	15
南洋食文化考.....	16
ロマンチックは滑走路から　－ツバル人の恋愛－	17
◆調査方法	18
◆諸経費.....	19
◆装備品リスト	21
◆通信体制について.....	22
◆保健衛生について.....	24
4. 発表	25
5. 隊員紹介	26

1. 趣旨

ツバルは、南太平洋に浮かぶ9つの環礁からなり、その海拔の低さゆえに海面上昇の影響によって世界で一番初めに沈むだろう、といわれている国である。このツバルの存在を知り、探検部の活動を通じて人々の環境問題に関する意識をもっと高められないだろうか、という思いつきから、今回本計画を立ち上げることとなった。

私たちは2003年8月、このプロジェクトのための現地視察を行った。そして、そこでの滞在を通じて、「ツバルは環境問題ばかりが取り上げられることが多いが、そこには実際に暮らしている人たちの日常がある」という当たり前のことを改めて実感した。人々が守ってきた文化や何気ない生活を知るほうが、統計的なデータを示すよりも、ツバルという国、人々に親近感を持つことができるのではないだろうか。それによって、特に関心のない人でも、彼らが直面している現実を見ることで環境問題をより身近に感じられるはずだ、という思いから、私たちは今年2004年8～9月の現地調査を含む、以下のような活動を行う。

地球温暖化による海面上昇の実態と、ツバルの人々の環境問題に対する意識を調査する。同時に、約2ヶ月間のホームステイを通じ人々の生活をじかに体験しつつ、各隊員がそれぞれツバルについてのさまざまな事柄を調査する(項目、手段については後述)。また、ツバルと日本の文化交流や、ツバル政府と連帯して行うゴミ回収も考えている。

帰国後は、現地での調査や活動から得た結果をまとめ、それを出来るだけ多くの人に伝える。その手段として、新聞、雑誌、テレビ、インターネットなどのメディアや、小中学校、高校などでの講演会、写真展を挙げる。

このように、①ツバルの環境問題だけでなく、人々や文化についてもわかりやすく印象的な形で社会に発信し、まずこの国そのものに興味を持ってもらう、②環境問題をリアルに認識し、それを通じて関心を深めて、環境問題改善に向けて行動に結び付けてもらう、というのが本計画の目的である。



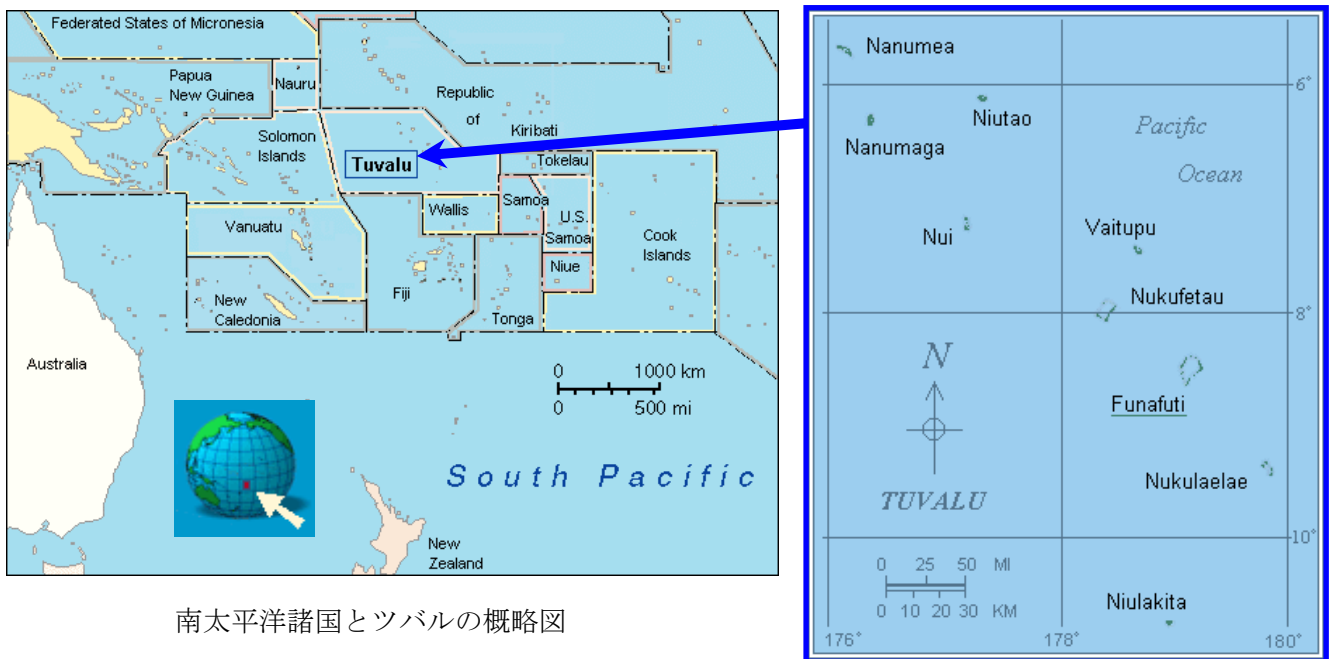
2. ツバル(Tuvalu)という国

◆ ツバルとは

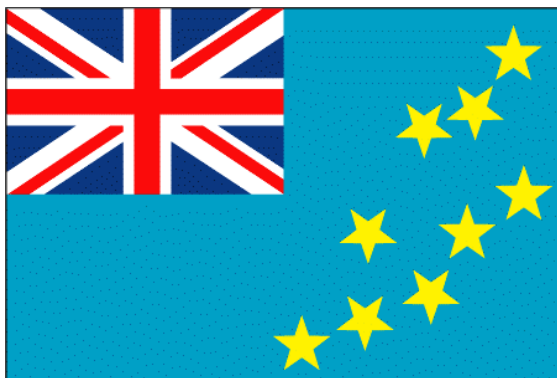
ツバルはキリバス共和国とフィジー共和国の間に位置し、赤道からわずかに南、日付変更線のわずかに西の、南緯 05~11 度、東経 176~180 度の太平洋に点在する 9 つの環礁群により構成されている。首都フナフチは、南緯 08 度、東経 178 度に位置する。

国土面積はバチカン市国、モナコ公国、ナウルに次いで 4 番目に小さく、人口は 2 番目に少ない。しかし、領海と排他的経済水域を合わせると約 130 万 k m^2 にもなり、豊富な海洋資源を有している。ツバルは、穏やかに輝くラグーンや青々と生い茂るヤシの木に囲まれて国民がおおらかに生活をする、魅力的な場所である。

しかしその一方で、ツバルは小国でありながら海面上昇・ゴミ処理・人口増加などの解決が困難な問題を多く抱えている。平均海拔約 2 m のこの国は温暖化による海面上昇の影響が最も深刻な国である。



南太平洋諸国とツバルの概略図



ツバル国旗

国旗の由来：

青は太平洋を、星はこの国を構成する 9 つの島々を表している。カントンのユニオンジャックは、英連邦の一員であったことを表している。建国時には 8 つの島が協力して国を作ってゆこうという意味で、Tu (立ち上がる) + Valu (8 つ) とされたが、これは当時 9 つめの島(Niulakita)が無人島であったために数えられなかったもの。

基本データ（2001年）

首都	フナフチ（Funafuti）（フナフチ環礁フォンガファレ島）
人口	10,991人
政体	議会制民主主義を持つ立憲君主制度
元首	エリザベス二世女王（英国女王。但し、通常は総督が王権を代行）
総督	ファイマランガ・ルカ（Mr.Faimalaga Luka）（03年9月8日就任、任期4年）
通貨	オーストラリアドル A\$
言語	英語/ツバル語（ポリネシア系言語でサモア語に近い）
教育	成人識字率 95.0%
宗教	プロテスタント・ツバル教会 85%
人種	ポリネシア系 91% その他（ミクロネシア系等）9%
産業	農業及び漁業が主要な産業であるが、自給自足的な部分が多い。その他、若干の建設業、サービス業等がある。輸出産業は皆無である。国家財政の収入源は、入漁料と外国漁船への出稼ぎ船員等による海外送金が主で、財政赤字をツバル信託基金（ツバル、英、豪、NZの拠出により、87年に設立）の運用益から補填していた。また、これらの収入源のほか、切手販売がある。

略史

0年頃	ポリネシア系民族がサモアやトンガなどからツバルに移住
1568年	スペイン人メンダナ、エリス諸島のヌイ（Nui）島発見
1820年代	捕鯨船の寄港が始まってから、交易のために多くのヨーロッパ人が訪れるようになる。
1892年	ギルバート・エリス諸島として英国の保護領となる。（イギリス領エリス諸島）
1915年	エリス諸島として英国の植民地となる。
1916年	イギリス領ギルバート諸島とイギリス領エリス諸島が合併し、ギルバート・エリス諸島となる。（イギリス領ギルバート・エリス諸島）
1975年	イギリス領ギルバート諸島（現キリバス）と分離し、ツバルと改称する。（イギリス領ツバル）
1978年10月1日	イギリスより独立（イギリス連邦自治領ツバル）
2000年9月	国連加盟

※ギルバート諸島はツバル（エリス諸島）の北にあり、現在はキリバス共和国の一部となっている

気候

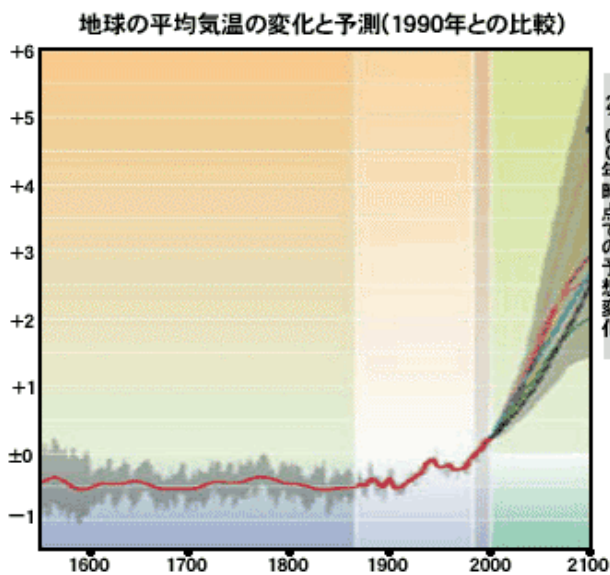
3月から10月頃までは東風が吹き、平均気温も26～30℃程度で、比較的過ごしやすい季節である。11月頃から2月頃までは西風の季節となる。この時期は雨が多くなり、気温もやや高くなる。

降水量は、フナフチで年平均約3000mm。国全体の海拔が極端に低いため、ひとたび台風が来ると全島冠水ということにもなる。赤道に近いため、めったに台風が襲うことはなかったのだが、近年は温暖化やエルニーニョによる異常気象の影響で台風による被害が頻発している。

◆ツバルが抱える問題

地球温暖化とツバル

地球温暖化は、気温上昇だけでなく自然災害などのさまざまな気候の変化をもたらし、生態系の基盤を脅かすという、人類社会の直面する最も大きな問題であるといえる。この問題が大きいのは、人間活動の基盤となっている石油や石炭などのエネルギー利用に原因があるからである。また、地球温暖化は気温の上昇によりさまざまな二次変化をもたらす。砂漠化や海面上昇も人間活動に大きな影響を与えている二次変化の一つであるといえるだろう。



地上気温は近年急速に上昇している。過去 140 年に世界全体で約 $0.6 \pm 0.2^{\circ}\text{C}$ 、日本では約 1°C 上昇した。そして 1990 年から 2100 年までの平均気温の上昇は世界全体で $1.4 \sim 5.8^{\circ}\text{C}$ と予測されている。

この気温の上昇により、さまざまな気候変化が起こると予測されており、人間活動にも大きな影響を与えることが考えられる。例えば、強い降水現象の増加や、海面上昇である。これらにより、世界各地で洪水、冠水などの被害が多発する可能性が高い。

堅苦しく書いているが、これは一大事である。上のグラフを見てもわかるとおり、過去数百年間の変化に比べても比較にならないほどの気温上昇が予想されている。洪水以外にも、「温暖化」は極端な現象を増加させ、干ばつなどの危険性を増加させる可能性が高く、このようなことになれば、大きな被害を受ける地域の人々は生活を失い、または命を落とすことにもなるかもしれないのである。

人類以外の生物にとってはさらに被害は深刻である。環境の急速な変化に対応しきれない動植物は絶滅せざるを得ない。

このような現象を人間活動が引き起こしているという事実はもっと多くの人が認識しなければならないのである。

「温暖化」により世界の平均海面水位は、この 100 年間で $0.1 \sim 0.2\text{m}$ 上昇した。熱膨張による海水の体積の増加や、氷河、氷帽の融解が主な原因とされており、さらに「1990 年から 2100 年の間に $0.09 \sim 0.88\text{m}$ (中間値で約 0.5m) の海面上昇が起こる」という予測がされている。このため平均海拔約 2m のツバルの国土は消失の危機に瀕している。もし実際に国土が沈んでしまえば、ツバルの国民は住む土地を失い、「環境難民」となってしまう可能性もある。

ツバルでみられる温暖化の影響として次のような実例がある。

- ① 海面上昇や、サイクロンの増加による海岸浸食、洪水
- ② 海水流入による田畑、井戸水の海水化

- ③ 島中央部での海水の湧き上がり
- ④ サンゴ礁の白化（死滅）、またこれによる周辺に生息する生物への影響（漁業にも影響を及ぼす）
これらは現地で暮らす人々の生活や、生態系に多大な影響を及ぼしており、今後さらに被害は拡大してゆくとみられている。



〔写真〕
海面上昇の影響により、
侵食の進む小島

※ 出典（グラフ・データ）：IPCC（気候変動に関する政府間パネル）第三次評価書（2001年）

人口過密・移住問題

前述の通り、ツバルは地球温暖化に伴う海面上昇で深刻な被害を受けており、海岸侵食や島の内部での浸水は年々その規模を増している。「島が沈むのも時間の問題である」と判断したツバル政府は、オーストラリアとニュージーランドに非公式ながら移民の受け入れを要請した。この要請に対して、ニュージーランドは年間 75 人まで永住を前提とした受け入れを公式に承諾したが、その一方、オーストラリアはこれを拒絶した。オーストラリアの見解は、ツバルの移民受け入れ要請は、人口の急増による財政負担を少しでも軽減させるために、出稼ぎ労働者を輩出し外貨を得たいためであり、海面上昇をその言い訳にしているにすぎない、というものである。

確かに現在、ツバル、特に首都フナフチでは人口の過密が問題となっている。

ツバルは人口が少なく、国土も極端に狭く、目立った天然資源も持たない。ツバル政府はこのような自国の経済を助けるために 1987 年のツバル信託基金の設立を始め、切手の発行、排他的経済水域における漁業権の譲渡、カントリードメイン権の譲渡など行ってきたが、継続的に得られる外貨の獲得手段としては、外国船に派遣する海員の養成を行い、この海員の外国船への出稼ぎや、ニュージーランドなど外国への出稼ぎに頼っているというのが現状である。

このように、ツバルでは国民の外国への出稼ぎが外貨の主要な手段となっており、数年前まで出稼ぎ先の多くはナウルという国の燐鉱山であった。しかし近年、この鉱山資源が底をつき始め、出稼ぎ労働者の大幅なリストラが行われた。ツバルからナウルへは常に 1,000 人程度が出稼ぎに行っていたのだが、このリストラにより、多くの人々がツバルに帰国せざるを得ない状況となった。これによりフナフチの人口が急増、1985 年に 2,800 人だったフナフチの人口は、2003 年には倍近い 5,300 人まで増加した。そして、これに伴いフナフチでの失業問題が深刻化しているのである。現在失職し帰国した人数はフナフ

チの人口の 2 割に当たる約 1,000 人。失業者の増加によって、今まで大きな犯罪が起こる事のなかったツバルの治安の悪化も懸念されている。

また、島内部への浸水によって主食として食べられてきた芋の栽培ができなくなるなど、伝統的な自給自足生活を送れなくなってきており、食料を購入する人が徐々に増えつつある。物を購入するためには収入が必要だが、ツバル国内にはそれを得る手段がない。収入を得るためには出稼ぎに行くくらいしか方法がないのである。

確かに移住の要請には、人口過密状態を脱し、外貨を獲得するためという面もあるだろうが、ツバルが非常に危機的な状況にあることは変わりがない。長期的に見れば、恐らくツバルの国土は本当に沈み、人々が国外へ移住しなければならなくなる日は遅かれ早かれやってくるだろう。その時が来てから対応したのでは遅い。移住問題はツバルの人々にとって深刻な問題であることに違いはない。

【ニュージーランドが提示した移住の条件】

ツバル国民であること
18～45 歳であること
英語でのコミュニケーション能力があること
NZ での職があること（家族を伴う場合は年収 NZ\$28,276 以上）
違法滞在歴がないこと

※移住希望者は移住申請を行う前にまず抽選に参加し、当選しなければならない

※1 年間につき 75 名まで

ニュージーランドの受け入れにより、ツバルでは 2002 年 7 月 1 日から公式にニュージーランドへの移住制度が始まった。しかし、そう遠くない将来どこかに移住しなくてはならないツバル国民にとって、この条件は厳しいものであり、実質的な解決策になっていないのが実情である。

出典：<http://www.tuvaluislands.com/news/archives/2003/2003-10-13a.htm> (2004/02/09)

<http://www.foejapan.org/pacific/issue/020610.html> (2004/02/09)

ゴミ・汚水処理問題

地球温暖化による海面上昇に次いで、近年ツバルではゴミや汚水の処理問題が扱われている。ゆったりとした南の島のイメージから、ツバルは一見ゴミ問題などとは無縁に思われるが、実はこれが深刻な問題となっているのである。

私たちは 2003 年 8 月の現地視察の際に、ツバル政府 Waste Management（ゴミ、汚水問題の担当部署）のソマ氏へのインタビューを行い、その際にゴミ、汚水問題の現状、対策について伺った。

国土が極端に狭く、処理技術や十分な資金を持たないツバルでは、ゴミや汚水の処理施設を建設することができないどころか、たとえ処理することができても最終的にゴミを処分することはできない。日本のように埋立地を作る要領でゴミを埋め立てて処理しようにも、そのための土ですら自国内で賄うことができない。

十数年前まで、ツバルでは伝統的な自給自足生活が過不足なく営まれ、自然の循環が成り立ってきた。

ゴミは分解性のもの以外ほとんど排出することがなく、土壌で分解されてきた。しかし、海面上昇の影響により作物が取れなくなると、人々は自給自足的な生活が営めなくなり、輸入されてきた食糧に頼らざるを得なくなった。温暖化がその理由の全てではないが、輸入されるものが増え、その消費が増えれば、当然ゴミも増える。それまでは地中に埋めればそのほとんどがそのまま分解されてきたが、最近では缶やビニールなどの非分解性のゴミが急増し、ただ埋めれば済むという訳にもいけなくなった。

では、現在ゴミや汚水はどこでどのように処理されているのか。

国内で出されるゴミは、まず分解性のゴミと非分解性のゴミの2つに分けて出される。その後、分解性のゴミは砕かれ、肥料にされる。一方、非分解性のゴミは焼却処理することもできないので、そのままの形で **Dump Site** と呼ばれる穴（第2次世界大戦中に米軍が滑走路建設用の埋め立ての際に掘ったもの）に捨てられる。この内、少量のアルミ缶に関しては、オーストラリアに送られ、リサイクルされている。また、汚水は畑のタンクに集められ、肥料にされていたが、タンクに納まりきれなくなり、フナフチの一部の地域で試験的に豚の飼料として使用されている。このように、形の上では処理されているように見えるのだが、実際にはさまざまな問題を抱えている。

海面の上昇により、海水が島の内部まで浸入するようになってしまった結果、**Dump Site** にも海水が流れ込み、捨てられたゴミが穴の外へと流出してしまい、さらにそのまま海へと流されていってしまうこともある。また、ツバルの人々には、ゴミをきちんと処理、分別するという習慣がなかったせいか、道端にゴミを捨ててしまう人が多く、畑に肥料として埋めるにも、ビニールやペットボトルなどの非分解性のゴミを分解性のゴミと区別できずに埋めてしまう人がいる。当然これらのゴミは分解されないため、いつまでも地中に残ってしまう。政府は回収ボックスを設置する、ゴミの分別についての講習をするなどの対策を講じているが、未だに改善されていない点が多い。



〔写真〕 **Dump Site** に捨てられたゴミ



また、汚水に関しては、試験的に試料として使用しているとはいえ、それもごく一部の地域に限られており、ほとんどの汚水は土壌に染み込んでしまっている。ツバルの国土はそのほとんどが珊瑚礁でできているため、粗い土壌を抜け、環礁内に汚水が流れ出てしまっている危険性もある。

これらの問題は、直接ツバル周辺の海洋、水質の汚染につながってしまい、動植物への影響も懸念されているため、対応が急がれる。

〔写真〕
海岸にあふれるゴミ

3. 現地調査

◆調査日程

今夏に予定している現地調査の日程は以下の通りである。

日付	行動予定
8/2 (月)	成田空港発
3 (火)	ナンディ空港 (フィジー) 着 首都スバへ
4 (水)	スバ滞在
5 (木)	ナウソリ空港 (フィジー) ⇒フナフチ空港 (ツバル)
6 (金)	フナフチ環礁⇒バイツプ島
7 (土)	バイツプ島滞在・調査
8 (日)	
29 (日)	
30 (月)	バイツプ島を離れ、隊を分割
	ヌイ島、ヌクフェタウ島、フナフチ環礁へ
31 (火)	ヌイ島、ヌクフェタウ島、フナフチ環礁滞在・調査
1 (水)	
9/9 (木)	
10 (金)	各島からフナフチ環礁へ
11 (土)	フナフチ環礁滞在・調査
12 (日)	
26 (日)	
27 (月)	フナフチ空港 (ツバル) ⇒ナウソリ空港 (フィジー) スバへ
29 (水)	ナンディへ
30 (木)	ナンディ空港 (フィジー) 発
	成田空港着

- ・ツバル入国後、ただちに全員バイツプ島に移り、25日間滞在。
- ・バイツプ島滞在后、ヌイ島、ヌクフェタウ島、フナフチ環礁に分かれ、11日間滞在。
- ・その後、首都フナフチのあるフナフチ環礁に18日間滞在。

◆調査項目

この計画の趣旨は、最初に述べたとおり、ツバルの環境問題だけでなく、人々の生活や文化も伝えることで、環境問題により深く関心を持ち、行動に結び付けてもらうということである。ここで重要なことは、環境と生活や文化の関わりである。

ツバルに限らず世界中の人々は、自然環境の中でそれぞれの生活を営み、その中でさまざまな文化、伝統を作り上げてきた。今、自然環境の変化により、これまで守ってきた人々の生活、文化が存亡の危機に瀕しているといっても大袈裟ではない。

環境と生活や文化の関係を、ツバルの人々の生活を通して目の当たりにすることで、より身近に感じてもらうために、ツバルの全体像をさまざまな角度から映し出すことを目的とし、以下のような調査項目を設定した。

人によって色々な考え方、捉え方をすると同じように、私たち隊員も色々な方向から「ツバル」を捉え、その結果、より多くの人々からの共感、関心を得られれば幸いである。

部門	調査項目	担当者	掲載ページ
環境	温暖化が与える影響と政府、人々の意識	黒川 圭太	10
	南の島ツバルがゴミの島に！？ - ゴミ・汚水の処理問題 -	黒川 圭太	10-11
社会	スッパ抜き！？ - ツバルの政治・経済 -	野澤 昌勝	11
	人口過密、失業問題について	黒川 圭太	12
	ツバルっ子がゆく - ツバルの教育 -	讃岐 友子	12
歴史	ツバル、人と国	今井 美津子	13
	4・23 事件 - ツバルの歴史 -	清水 藍子	13
	信仰と伝説	魚住 直未	14
	伝統舞踊・楽器・歌	小此木 朋子	14
生活	ツバルの医療について	岡原 祥子	15
	衣服について	魚住 直未	15
	南洋食文化考	綱島 祥三	16
	ロマンチックは滑走路から - ツバル人の恋愛 -	今井 美津子	17

次頁より簡単な調査内容の紹介を記載した。

【環境】

温暖化が与える影響と政府、人々の意識

黒川 圭太

小さい国ながら、海面上昇やゴミ問題などの大きな環境問題を抱えてしまっている「ツバル」。特に地球温暖化に伴う海面上昇は、ツバルの全ての人々が住む土地を無くしてしまうかもしれないという、国の存亡に関わる問題である。ツバルでは実際に地球温暖化によってどのような影響を受けているのか、また、ツバルの政府、人々はその事実をどのように受け止めているのか、という点を中心に調査を展開する。

＜調査方法＞

a. ツバルにおける温暖化、海面上昇の現状調査

現地を周り、より住民に近い視点で、海面上昇やゴミ問題の影響を捉え、記録する。

b. 人々へのインタビュー

現地で暮らしている人々が、温暖化やそれに伴う海面上昇に対してどのような意識を持っているのか、(原因を作った)先進諸国に対してどのような感情を持っているのかなどを直接伺う。

c. 学校訪問

次代を担う若い世代の人は、どのような意識を持っているのか、環境に関してどのような教育が行われているのかを、教員や生徒にインタビュー、アンケート調査を行うことで調べる。

d. 政府・省庁訪問

政府としての、現段階での環境問題への見解、今後行う予定の対策などを担当官に伺う。

e. 環境関連施設、自然保護区域等の見学

ツバルの環境関連施設や自然保護区域を見て周り、国としての取り組みを調べる。

南の島ツバルがゴミの島に！？ —ゴミ・汚水の処理問題—

黒川 圭太

ツバルは9つの島の面積を全部足しても東京都の品川区と同じ程度の大きさにしかない。品川区の場合、出したゴミは江東区などの埋め立て地に運ばれ、捨てられるが、ツバルではそうはいかない。国内で出されたゴミは、どこに運ぶこともできずに、ただ穴に捨てられるだけ。もちろん穴はいっぱいになって、島にゴミがあふれてしまう。ツバルは、海に沈んでしまう前にゴミに埋もれてしまうかもしれない。

ゴミのほか、ツバルでは汚水も処理することができないのだが、これらの問題はツバル周辺の海域の汚染にも直接つながる。汚れてしまっている日本の海では、ゴミが漂っていてもあまり関心が湧かないかもしれないが、『南の島』でも同じことが起こっているのである。

このテーマは、綺麗な海と汚いゴミを容易に対比することができ、「ゴミを捨てること」に対して分かりやすい意思表示ができる。日本での問題と比較することを念頭に置きつつ、問題の現状、住民の意見を中心に調査を進めていく。

<調査方法>

- a. ツバルにおける温暖化、海面上昇の現状調査
- b. 人々へのインタビュー
- c. 学校訪問
- d. 政府・省庁訪問
- e. ゴミ処理場・汚水利用施設の見学

【政治経済】

スッパ抜き！？ —ツバルの政治・経済—

野澤 昌勝

海面上昇に直面する南太平洋の島国「ツバル」に何があるのか。例えば資源、人材、など、企業からみた価値について述べてみると、かつてツバルの初代首相は「ツバルには海と太陽しかない」と宣言した。そう、一国の首相が公の場でそんなことを言うくらい、人（人口）、モノ（経営資源）、カネ（資本）、といった経済的な要素がほとんど存在しない国、それがツバルなのだ。未だに経済は首都でさえ自給自足が普及しており、当然大規模な企業活動など望むべくもない。外貨獲得の手段は、コブラ（主食の芋類）の輸出か、海外に出稼ぎに出ているツバル人の仕送りが大部分を占めており、よって国家財政の歳入はそのほとんどが海外からの援助に頼っているのが現状である。

しかし、それでもツバルは独立国家であり、当然国家を形成する司法・立法・行政機関がある（ハズ）。日本のような複雑な選挙制度や、政治体制、大規模な企業の経済活動などはないが、ツバルにはツバル独特の制度・体制を堅持している（ハズ）。

本調査は、現地での調査によってツバルの政治形態と選挙制度、国内の経済活動と海外からの援助金の使い道を調べ、さらにはツバルが沈みつつあるという現状をどう受け止め、どこに向かっているのかを知ることを目的として実施していく。

○アピールポイント

南国ツバル独特の政治・経済を調査し、日本の常識では測れない世界を垣間見る

<調査方法>

- a. 資料を現地の図書館で調べる
- b. ツバルの新聞を読む
- c. 町に出て政治経済を色濃く反映している部分を探查する
- d. ツバルの閣僚の方にインタビューをする

人口過密、失業問題について

黒川 圭太

現在、2.8k m²のフナフチ（フナフチ環礁フォンガファレ島）には5,000人を超える人口が集中している。人口密度として表せば、約1,800人/km²となる。これは、例えば東京都荒川区の人口密度が18,314人/km²であり、フナフチは単純にこの10分の1ということになるのだが、フナフチには小さいながらも空港があり、ツバルの全ての省庁もフナフチに集まっている。さらに、自給自足生活のための畑を1軒1軒の家がそれぞれ持ち、その家々はもちろん平屋がほとんどである。アパートやマンションの立ち並ぶ東京とは比べようがないかもしれないが、要するに、東京と同じような過密状態が赤道直下の南の島で起こっているということである。しかも、フナフチに住む5,000人のうち、その2割に当たる約1,000人は仕事を失って帰国した人々である。自足生活が営めなくなっている以上、収入を得て食料を購入しなければならないのだが、ツバル（特にフナフチ）では成すすべなく失業者が溢れかえっている。

このようなツバルの人口問題の実態を現地で調査し、人々の声を聞くことでツバル社会の底辺を映し出す。

<調査方法>

- a. フナフチに住む人々（特に失業者）にインタビューをする
- b. 政府関係者に人口過密の実態について伺う
- c. 移住問題と人口過密の関連性について政府関係者にインタビューをする

ツバルっ子がゆく —ツバルの教育—

讃岐友子

ツバルの学校はとても変わっている。唯一の公立中学校はバイツブ島にある。生徒たちは中学生になると各島からやってきて、そこで共同生活を送る。国中の同じ学年はみな、顔見知りだ。すべての島に友達ができる。「この間〇〇島に行ってきた。」「××元気だった？」「××と△△が結婚したんだよ。」「あれ、△△って□□島の☆☆と付き合ってたんじゃない？」うーん、仲良し？

学校でのことだけでなく、彼らをとりにくく全てのことが影響を与える。勉強、友達、先生、家族、ツバル、将来のこと。それぞれがさまざまなことを感じたり、考えたりして、毎日を過ごしている。同じところにとどまっではない。ツバルのこどもたちの今！の姿が知ることが一番の目的である。

また、彼らが受ける教育の内容からツバルという国が将来を託すこどもたちに何を望んでいるのかを見ていく。

<調査方法>

- a. 学校訪問
生徒、教師へのインタビューやアンケート
- b. 教育省を訪問
ツバルの教育制度、教育方針について調べる

【歴史】

ツバル、人と国

今井 美津子

日本人は西洋人のように自信を持って「お国自慢」をする人は少ないだろう。それは日本では謙遜することが美とされるから、とういうのもあるのだろうが、日本人自体が日本に自信がないからだと思う。現在「日本の将来は暗い」と考える人が増加傾向にあるという。しかし、「自分は日本人である」という帰属意識は大体の人々がもっている。では、独立して日の浅いツバルは自分達の所属についてどのように思っているのか。「自分はツバル人だ」と明確に思っているのか？それとも全く別の枠で捉えているのだろうか。独立前は今とは違う捉え方をしていたのだろうか。

「独立」という国にとって最も重要なできごととは、ツバル人の思考にどんな影響を与えたのだろうか。生活は変化したのか。生活の変化によって人々の物事の考え方、捉え方は変化したのか。それとも、それ以前と何ら変化なかったのか。独立前後のツバルの人々の帰属意識の変化と考え方の変化を探りたい。

要するに、ツバル人という人々はどのような思考の持ち主なのか、国のことをどのように思っているのかを知りたいのである。ツバル人の「お国自慢」をぜひ聴きたい。

方法としては、ツバル人がどの程度国を国として認識しているか調べるために、国旗と国歌という国のシンボルを一般の人々がどれくらい知っているかを調査する。また、独立前後の両方の生活を知る人にインタビューする。そして、政府と国民の意識の差をまとめ比較する。

4・23 事件 —ツバルの歴史—

清水 藍子

4月23日とは何の日か。答えは「爆弾の日」である。南太平洋に浮かぶ美しい南の島に不釣り合いな記念日であるが、これは、太平洋戦争時代の1943年4月23日に日本軍がツバルにあるアメリカ軍基地を空爆した際に死亡したツバル人を祀った日なのだ。日本から遠く離れたツバルが、日本とどれだけ関係があるのだろうか。他にもヌイ島には旧日本軍慰霊碑があったりと、当時の日本とツバルの関わり合いは深い。誰もが、一度は歴史に惹かれないか。私はそういったツバルの歴史に興味があるので、現地で見られる戦地跡や当時を知る人々の話、また戦後生まれの人々はその時代をツバルの歴史としてどのように捉えているかなどを探り、かつツバルという聞きなれない国と日本との知られざる関係を探っていきたいと思う。

<調査方法と主な内容>

人々へのインタビューと文献調査を柱として進める。

- a. 戦時中の体験をツバルの方に尋ねる。
- b. 戦時中に関する資料や文献を図書館などで入手する。
- c. ヌイ島にある旧日本軍の慰霊碑を訪れる。
- d. ツバルの歴史を子供たちにどのように教えているのか。
- e. 4月23日は具体的にどういったことをする日なのか。

信仰と伝説

魚住 直未

見ず知らずの他人を理解しようとするとき、その人の信じることを理解するのは一番大切で、でも一番難しいことだと思う。そこで今回ツバルの人を知るため、信じていることが最も記号化されている〈信仰〉に着目した。世界中の大半の人が〈信仰〉をもっている。自分を含め無宗教の多くの日本人に馴染みの薄い〈信仰〉。でも、だからこそ〈信仰〉を通してツバルをみることは、彼らの考え方の基盤や背景をとらえ、ツバルを感じることのきっかけになるだろう。

国民の9割がプロテスタントに属すツバル。キリスト教が来る以前、ツバルの島に住む人々は何を考え、何を信じていたのだろうか。島々に残る幾つかの伝承はすでに確認しているが、いまのツバルの人々のなかで、古い教えとキリスト教がどんなふうにあるのかは謎だ。それを探り、ツバルの人々と共に伝説に思いを馳せ、その世界にひたりたい。

<調査方法>

- a. 近所の人たちとの会話から、語り継がれてきた物語を聞く。
- b. 知識層へインタビューをする。
- c. 礼拝に参加する。

ツバルの伝統舞踊、楽器、歌

小此木 朋子

ツバルが属するポリネシアには数多くのポリネシアンダンスが存在する。

ツバルには主に、Fakanau と Fakaseasea という2つの踊りがあり、Fakanau は布教をしにきた宣教師にその動作は性的刺激を及ぼし、邪悪なものとなされ廃止されてしまった。またこの動作は難しく、人々は新しい宗教を受け入れたので、廃れてしまった。一方 Fakaseasea は Fakanau と違って、ゆっくりとしたスピードの美しい歌にあわせて踊り、動作の均一性を持たず、ダンサーは言葉の意味を表現した動作を自由に作る。宣教師がその美しくゆっくりとした動作に魅かれ、廃止しなかったために現代まで廃れずにすんだ。これらの踊りは統治の賛美やカヌー製造、漁、家の建設において突出した技術を祝うものであり、日常において、彼らと踊りは切っても切れない関係なのがかがえる。

そんなツバルの伝統舞踊、楽器、歌について詳しい方の家にホームステイや訪問したり、また夜の突発的な集まりに参加したりすることによって習得する。さらにこれを通してツバルの人々のありのままの生活に触れ、彼らの文化を知る。

<調査方法>

- a. ツバルの伝統舞踊、楽器、歌について詳しい方の家にホームステイや訪問をして、これらについて教えていただく
- b. 教えていただくことをとおして、ツバルの人々のありのままの生活に触れ、彼らの文化を知る
- c. フナフチにある図書館で伝統舞踊、楽器、歌についての文献を調べる

【生活】

ツバルの医療について

岡原 祥子

私は医学部に通っていて、将来は医療発展途上地域で働きたいと考えている。それは、なんでも手に入る先進国よりも、最低限の医療サービスが受けられないせいで、手に入れられるものも入れられない人たちがいる場所で働きたいと思うからだ。

私は今年の夏ツバルを視察で訪れ、そこの医療に注目した。一つ一つの離島には、小さな診療所に医師が一人と看護婦が数名いるだけだった。ツバルでは飲み水は全て雨水に頼っているが、そのような限られた条件の中で、彼らはどのように働き、人々にとってどのような存在なのだろうか？また、診療所での治療の他に、ツバルでは伝統医療も行われていて、頭痛や腹痛はもちろん、喘息なども治すことができるそうだ。これらの技術は家族ごとに代々伝えられるもので、外部にはあまり公開されない。

いずれにしても、現在の日本の一般的な医療体制とは全く異なる医療である。人が人を診る、というシンプルな形が見えていいなと思った。それらに携わる医者や、治療を受ける人達に会って話を聞くことで、自分が将来めざす医師の仕事について深く考える機会としたい。

<調査方法>

- a. 医師、看護婦の方にインタビューをする
- b. 診療所を見学し、仕事を見せていただく
- c. 訪れる患者さんにインタビューをする
- d. 伝統医療の技術を持つ方を訪ね、インタビューをする（できたら実際にその伝統医療を体験する）

衣服について

魚住直未

衣服を身に着ける動物は、人間だけだ。その衣服は、居住区域やその気候、民族の性質に強く影響されている。世界中には数え切れないほどの民族衣装が散らばっていて、その個性、変化の広さは私をひきつけてやまない。

島国ツバルの人々は、むかしはどんな服を着ていたのか。そして、その材料はどこから調達してきたのか。現代風の服になったのはいつからなのか。人が生活するうえで重要な「衣」に関するツバルの歴史、『色』を見たい。

<調査方法>

- a. 実際にツバルの人に行事を着ているところを見せてもらう
- b. 観察して、イラスト・写真で記録する
- c. 知識の中にあるポリネシアの装束と比較する
- d. 自ら着て、体で確かめる
- e. ウィンドウショッピングで現地の最新流行に染まる

南洋食文化考

綱島 祥三

この計画で僕は「食文化」というジャンルを担当することとなっている。これは僕自身が希望したジャンルで、その文化圏の気候風土と文化事情がよく反映されるカテゴリーである上に、世界の誰にとっても身近すぎるほど身近で、自分の日々のそれと照らし合わせてわかりやすく捉えることのできるうってつけの行為であると思われるからである。天災、戦時、他文化との接触、不況、バブル、文明化、祭礼、禁忌、倒錯的奇行、その他あらゆるシーンで食という行為がその象徴としての役割を担ってきた。こういった意味で、文化事情を描く際の皮切りとして食文化を持つてくることは非常に妥当であると確信している。単に何を食べているかだけでなく、「食材の捕獲および採集→調理→摂食」という一連の流れの中のどの行為にどのような意味があるのかを見て行きたい。日常の食事、祭礼時の食事、どのような祭礼が行なわれるのか、それは定期的に行なわれる類のものなのか、その島での滞在中に行われるか、その定期はどんな暦がもとになっているのか、不定期の祭礼があるとすればそれはどんな場面か(婚葬、葬儀など)、滞在中に出会える可能性はあるか、なぜその祭礼にその食材が使われているのか(例えば日本の新年を祝う正月の鏡餅だったら、なぜ餅で、なぜ2段に重ね、なぜ橙を天に乗せ、なぜ昆布を敷くのか、といった類)、なぜそのような行為なのか、キリスト教や文明との接触でもたらされた食生活の変化(ソロモン諸島やフィジーでは食人の習慣が蛮行として宣教師に強く禁止された)、豚のどこに価値があるのか、ポリネシアの多くの地域では、カメ漁・カツオ漁およびカヌーの操船で一人前になることが「男」になることの必須条件であったというのが、ツバルでもそうなのか、もしそうでないとしたらなぜツバルでは違うのか、ツバルでの「男」の条件は何なのだろうか。また最近ツバルでは、自給自足経済の行き詰まりを補うかのように急速に台頭してきている貨幣経済のもと、外国からの輸入食品が食卓を占める割合は増加の一途を辿っているらしく、しかし、現金を獲得する手段を依然としてほとんどの人が持ち合わせていない状況でもあるという。食っていくことだけでは困らなかった国に暮らしていた人たちにとって、これはもうたいへんな社会変化である。

こういった、食にまつわるさまざまな行為を描くことを通して、ツバルが温暖化問題を象徴するためだけにある国ではないことを確認し、そしてまた、なんとも表現しがたい絶妙なおおらかさに包まれた人々の暮らしを多くのひとに知って欲しいのである。生い茂るココナツの深緑、動物的な強烈さを放つバナナの大きな赤い花、眩しすぎて見ていられないはずなのにいつまでも見えてしまうラグーンの青、そして、どんな言葉に例えたとしてその描写が陳腐になる夕景の荘厳さ。そのどれもが、これでもかというほど輝いている。今まで聞いたこともなかったツバルとかいうところはそんなにも素敵な国なのかと誰かに思ってもらえたら、この企画を通して叶えたい僕の願いは成就されるのである。

ロマンチックは滑走路から ツバル人の恋愛

今井美津子

動物には発情期というものが存在する。発情期の彼らを見ていてよく「人間は一年中発情期だなあ」と思う。日本では、春は「出会いの季節」と期待し、夏になれば「恋の季節」とひと夏の恋を夢見たり、秋は秋でこの時期多い学園祭や体育祭でカップルが誕生しやすいし、冬になるとクリスマスなどのイベントが多いため一人身は寂しく感じたりする。要するに、一年のうちだいたい「恋の季節」なのである。一年中恋のことを話題に取り上げてしまうくらい、人間にとって恋愛は重要で身近なことなのだ。特に私たちのような十代後半や二十代の前半の男女にとってはさらにそうだとはいえるだろう。

文化は違えど、恋する気持ちは世界共通だ。恋愛の傾向はもちろん違うかもしれない。しかし、ドキドキしたり、わくわくしたり、すぐに落ち込んだり、相手のひとことで気分ががらりと変わってしまったり、そういう気持ちは昔も今も、どこの地域でも同じはずだ。私たちは千年も昔に書かれた『源氏物語』を読んで登場人物の気持ちに共感できるくらいなのだから。

つまり、私達にとって重要で身近で、おそらく一番共感しやすいだろう「恋愛」という角度からみたツバルは、より理解しやすく、このツバルプロジェクトの主な対象となっている日本人の若者たちの興味もひきやすいのではないかと思うのだ。

方法としては、やはり直接ツバルの人々から直接話を聴くことが重要だ。恋をするとどんな気持ちになるのか、やはり日本人と同じような感情を持つのか、恋愛の慣習はどんなものなのかなどについて聴きたい。また人気のデートスポット（飛行場の滑走路らしい）に実際にいってみる。映画館や遊園地などないツバルではどのようなデートが行われているのか？！デートを実際に体験できればなお良い。さらに、結婚についてはどのように考えられているかも調べる。これは、話をきくとともに、法律も調べる。

◆調査方法

観察・体験

人々の生活、伝統や、学校での教育、環境問題の現状など、実際に自分達の見たり体験したりすることで、より身近な視点での情報を得る。得た情報は文章、音声、映像、写真などの形にして記録する。また、現地での滞在はホームステイという形を取り、よりツバルの人々の感覚、感情を受け取りやすいものとする。

聞き取り（インタビュー）

ツバルの人々に直接聞き取り調査を行う。「生の声」を聞くことで、現地で生活している人々の気持ちを直に感じ取る。また、調査項目に関する各機関の担当官からも同様に聞き取り調査を行い、方針や実施していることなど、項目に沿った質問を行う。

アンケート配布

学校や街頭などでアンケートを配布。聞き取りによる調査では対象とできる人数や、質問数も限られてしまうため、これを補填する形で行う。質問内容は、調査項目に関すること、その他関心のあることをまとめ、同じ人に複数回の調査は行わないようにする。

映像、写真撮影

上記の調査に加え、映像、写真撮影による記録を行う。日本で発表する際、発表の受け手により印象を強く与えるため、視覚・聴覚に訴えかける手段として最善と考える。文章、音声では伝えることのできない膨大な情報を受け手に伝えることができる。

【島内の移動手段について】

現地での移動は徒歩、若しくは自転車による移動を考えている。ツバルまでの輸送の可否、またその費用の捻出などの理由により自転車を持参することが困難な場合は全て徒歩での移動とする。また、環礁内の小島などへの移動はカヤック(日本より持参)若しくは現地で手漕ぎのボートを借りて使用することとする。

◆ 諸経費

※帰国後の発表にかかる経費は、発表方法が正確に決まり次第改めて算出する。

(単位：円)

	1人あたり	9人分
【渡航・宿泊】		
航空券代 日本フィジー間往復 (Air Pacific) (ピーク時の運賃で算出)	150,000	1,350,000
フィジーツバル間往復 (Air Fiji)	85,000	765,000
フィジー国内移動費 (ナンディ〜スバ〜ナウソリ空港間往復 一人あたり\$50)	3,150	28,350
フィジー宿泊費 (\$33×5泊)	10,395	93,555
ツバル滞在費 (ホームステイ・1泊\$30×52泊と想定)	126,360	1,137,240
各島 (フナフチ・バイツプ・ヌクフェタウ・ヌイ) 間移動費 (2島間片道一人\$7)	1,134	10,206
各島間移動の際に警備艇を一度チャーター(\$1200/24h)		97,200
ツバルビザ発給費	2,000	18,000
合計		3,499,551
【輸送費】		
シーカヤック・自転車輸送費 日本フィジー間往復 (Tasman Orient)		240,000
フィジーツバル間往復 (Air Pacific) (\$1980)		124,740
合計		364,740
【医療費】		
医薬品購入代 (詳細は「保健衛生について」の項目を参照)		78,560
保険加入料 (AIU 海外保険 2ヶ月まで)	26,430	237,870
合計		316,430
【通信費】		
通話料金 (日本〜フィジー、日本〜ツバル、ツバル国内) (A\$406)		32,886
合計		32,886
【予備費】		
診察料		50,000
警備艇チャーター (緊急搬送) (\$1200/24h)		97,200
ツバル国内での交通費、その他雑費		20,000
装備品輸送費 (輸送費として計上した額を超えた場合)		50,000
航空機手荷物超過料金 (\$10/1kg) (1人 \$300と想定)		170,100
合計		387,300

【装備費】

ビデオカメラ（周辺機材を含む）	¥148,000×3 台	444,000
バッテリーパック	¥17,200×3	51,600
miniDV（90分5本セット）	¥4180×20	83,600
S Dメモリーカード（512MB）	29,800 円×3	89,400
スライドフィルム（36枚撮り20入り）	¥19,800×2	39,600
I Cレコーダー	15,800 円×9 台	142,200
海外用変圧器+プラグ		40,500
合計		890,900

総計（2004年1月19日現在のレート、\$1FJD=¥63 \$1AUD=¥81 で計算） 5,491,807

<補足>

- ・特記以外、フィジー国内で掛かる費用はフィジードル（FJD）、ツバル国内で掛かる費用はオーストラリアドル（AUD）で算出。
- ・通信費の内訳については「通信体制について」の項を参照。

◆ 装備品リスト

【共同装備】

調査・記録用

(単位：円)

品名	価格帯	個数	合計
デジタルビデオカメラ (+周辺機材)	80,000～170,000	3	240,000～510,000
バッテリーパック	15,000～20,000	3	45,000～60,000
動画用記録媒体 (miniDV)	800	90～120	72,000～96,000
静止画用記録媒体 (512MB)	25,000～35,000	3	75,000～105,000
海外用変圧器+プラグ	3,000～5,000	9	27,000～45,000
I Cレコーダー	10,000～20,000	9	30,000～90,000
合計			396,000～786,000

* 周辺機材にはカメラ用のアクセサリーのほか、交換用のバッテリーなどを含む

通信・移動用

品名	個数	備考
通信用トランシーバー	9	探検部所有ものを使用
シーカヤック (Nautilaid Raid II)	2	〃
現地移動用自転車	9	廃品を改修して使用予定
修理工具	1	スパナ、空気入れ、ドライバ等
医療パック	3	各島に1つずつ配備
地図	9	

【個人装備】(概略)

・調査・交流関連

ノートパソコン	その他記録媒体	日本の資料	カヤック用装備
バッテリー	電池	ツバルの資料、書籍	ヘッドランプ
銀塩・デジタルカメラ	ノート、筆記用具	アンケート用紙	遊具(交流用)
フィルム	辞書	日記帳	計画書

・保健衛生

個人用医療パック	蚊帳	サングラス
日焼け止め	帽子	

・生活関連

食料(最低限)	パスポート	洗面用具(分解性)
携帯用食料	正装	釣具
国際学生証	防寒着	缶切り
保険証	その他衣類	

◆通信体制について

どんな先行きになろうとも各島間の連絡やツバル～日本間の連絡体制を作るうえで必要なのが、現地にはどのような通信設備があるのか知ること。この調査結果をもとに計画内容に合わせて連絡体制を作っていく。

表1. 各島の通信整備状況

	電話	インターネット
フナフチ	町の中心部に公衆電話屋 (TELECOM) があり 24 時間使用可能。国際電話も OK。料金は下の表 1 参照。 官公庁のオフィスや商店、学校、病院など、たいていの施設には電話が通っている。	TELECOM の 2 軒隣にネットカフェがあり、月～金の午前 8 時から午後 4 時まで使える。料金は表 2 参照。 官公庁のオフィスには通っているがそのほかは未確認。
ヌクフェタウ	TELECOM に 2 台あるのみ。	なし
その他離島	未確認	なし

※ 携帯電話はない。

表2. フナフチ TELECOM 料金表 (1分あたりの金額)

Countries	Off peak (7p.m.~8a.m.)(A\$)	Normal (8a.m.~7a.m.)(A\$)
Australia	1.50	1.70
\$2.00	2.20	
\$2.50	2.70	
Rest of the world	4.00	4.20
National Calls	0.60	0.80

表3. フナフチネットカフェ料金表

Time	Charge(A\$)
10mins	1.00
15mins	1.30
20mins	1.70
25mins	2.00
30mins	2.50
35mins	3.00
40mins	3.30
45mins	4.00
50mins	4.50
60mins	5.00

フナフチから東京へは何の支障もなく電話できた。3分の会話で A\$12 は国際電話であるとはいえ高額だが、地理条件や採算の問題を考えれば仕方がないだろう。インターネットは通信速度が遅く、岡原・綱島二人がメールチェックするだけで 30 分を要したこともあった。フナフチからどこかへ連絡を入れる場合は問題ないが、離島間で連絡を取り合う場合はどうするか。フナフチとヌクフェタウ以外の電話事情は未確認であるのでパーニ氏に聞くなどして明らかにしなければならない。また、病院や警察署などの各施設の電話番号はどうしても手に入らない場合はパーニ氏に相談するのがよいだろう。

【ツバル～日本の連絡拠点】

ツバル

バイツプ滞在中	→バイツプの TELECOM
ヌイ、ヌクフェタウ島、フナフチに滞在中	→フナフチの TELECOM
フナフチに全員が滞在	→フナフチの TELECOM

日本

留守本部（現役探検部員）

【通信連絡体系】

<定時連絡>

定時連絡は現地から日本留守本部に通信係が行う。頻度は一週間に一度程度とする。またインターネットでの報告も同じく行う。隊員間の連絡はトランシーバーの場合、時刻を決め行い、TELECOM の場合は可能な限り行う。

<緊急連絡>

非常時の場合はその非常事態の状況によって考慮する。原則的にどんな些細なことでも日本留守本部には連絡を入れること。

・ 負傷の場合

負傷者とともに同行している者は直ちに救護要請をする。必要があれば病院またはパーニ氏へ連絡。後、各隊員、留守本部に連絡する。緊急の場合、保険会社へ連絡することも考慮する。この場合日本語で連絡可。

隊員一人の場合は近くの人に救護を求めるとともにすばやく他の隊員に連絡することを要請すること。

・ 病気の場合

重病で医者診断を受ける場合、フナフチの病院へ連絡する。留守本部にも事情を説明すること。フナフチでの処置等が困難な場合はフィジーの病院へ連絡する。

・ その他事件の場合

何か事件に巻き込まれた場合、フナフチの警察へ連絡し、その指示に従う。後、留守本部へ報告すること。

<日本から現地への連絡>

日本での何か緊急事項を現地の隊員へ伝える場合、パーニ氏へ連絡を取るようにする。その後、隊員が連絡を受け、折り返し連絡する。

【通信にかかる費用】

フナフチから日本へ（5分間 A\$20）	週 1×8回=A\$160	
インターネット利用料（1時間 A\$5）	週 1×8回=A\$40	
ツバル内での電話連絡（5分間 A\$3.5）	週 2×8回=A\$56	
その他国際電話（各料金は別紙参照）	約 A\$50	
予備費	約 A\$100	計 A\$406

◆保健衛生について

【医療品】

共同装備（3パック）

（単位：円）

品目	内容量	予想価格帯	個数	計
風邪薬	14包	1,000	9	9,000
胃腸薬	60～70錠	1,000	3	3,000
解熱鎮痛剤	40錠	1,500	3	4,500
下痢止め	40錠	1,000	3	3,000
便秘薬	40～50錠	700～1,000	3	2,100～3,000
化膿止め	10g	800	3	3,200
消毒薬	20g/30ml	400～700	3	1,200～2,100
テラマイシン	10g	1,000	3	3,000
外用湿疹皮膚炎薬	10g	1,000	3	3,000
痒み止め	20g/50ml	500～800	3	1,500～2,400
虫除け	50ml	700	3	2,100
湿布	15枚	1,000	3	3,000
ガーゼ	30cm×5m	300	6	1,800
包帯		400	6	2,400
絆創膏	20枚	300	3	900
紙テープ		100	3	300
テーピングテープ	25mm幅	400	3	1,200
冷却剤	12枚	720	3	2,160
体温計		2,000	3	6,000
はさみ		100	3	300
爪切り		100	3	300
刺抜き		100	3	300
マルチビタミン	2ヵ月分	1,200	9	10,800
カルシウム	2ヵ月分	1,200	9	10,800

合計 75,860～78,560円

個人装備

- ・絆創膏
- ・消毒薬
- ・水
- ・常備薬
- ・ナイフ（ハサミ）
- ・スポーツドリンク
- ・虫除け
- ・ライター
- （粉末）
- ・かゆみ止め
- ・日焼け止め
- ・サプリメント
- ・医療ガイドブック

4. 発表

ツバルプロジェクトにおいて、「発表」は「調査」とともにプロジェクトの両翼を担うものであり、この「発表」の成功なくして趣旨の貫徹は有り得ない。

私たちは「発表」を通じて人々の環境への意識を変えるきっかけを与えることを目的としており、可能な限り多くの人々に、私たちが行っていること、そして「ツバルの素顔」を伝えることでその可能性の幅を広げることができると考えている。

そしてそのためにはさまざまな場所、形で「発表」を行うこと、メッセージを送ることが必要である。

前頁までに述べたテーマ、日程、方法に沿った調査で得たものを以下の様な方法で発表し、この活動を報告するとともに、環境問題を社会にアピールする場として最大限に活用したい。

【発表方法】

・ 写真展

現地での生活を通じて記録した写真を見てもらう。視覚から受け入れるメッセージは多くの情報量を持ち、「ツバル」を効果的に伝えることができると考えている。また、地区センターや大学、その他さまざまな会場を設定することができ、機会を設け易い。

・ 学校での講演会（横浜市大・隊員母校など）・特別授業

直接人々に伝えられる機会であり、自分達の考えやツバルで得た感覚などをより深く理解してもらえると考えている。他の方法に比べ、多くの人々には伝えることができないが、自分達と同世代の人々、また将来社会を担うであろうさらに若い世代の子どもたちに伝えることは、小さいかもしれないが重要なことではないだろうか。具体的には、大学内での講演会、隊員母校や近隣の学校（小・中学校、高校）での講演会・特別授業を行うことを予定している。

・ TV 放映

多くの人に伝えることができ、多くの情報量を効果的に伝えることができる。現地での映像を人々に伝え、より私たちが得る印象・感覚と近いものを与えることができると考えている。

・ 雑誌掲載

さまざまな雑誌が発刊されており、ジャンルなどにより読者の層は異なるが、多くの雑誌の中にはこのプロジェクトの趣旨と近い内容のものもある。そのような雑誌を作っている方々に協力をしていただき、より強く効果的なメッセージを発信してゆきたい。

・ 新聞掲載

TV放映などとはまた異なる受け手を対象とすることができる。また、多くの人に伝えることが可能であること、日刊であるためにその機会を設け易いことが考えられ、ツバルでの現地調査前や調査中にも、受け手の人々にメッセージを発信できるのではないだろうか。

上記の発表方法やこれら以外のものについても、順次交渉を進めてゆく次第である。

5. 隊員紹介

[①氏名・年齢・担当 ②所属学科・学年 ③計画への意気込み]



①岡原 祥子 (21) 隊長・渉外

②医学部進学過程 3年

③環境問題について、小さいころからなぜか興味があった。医者になって、将来医療途上国で働こうと決めたのも、そういう世界規模の問題を考える視点をずっと持っていたからだと思う。今回のツバル計画は、個人でできることの枠を超えて環境問題に取り組み、それを通じて他の人にも影響力を与えられる、大きなチャンスだと考えている。それを気の合う友達と一緒に楽しく実行していけるのが、とてもうれしい。みんなありがとう☆



①清水 藍子 (21) 副隊長・通信

②国際文化学部日本アジア文化学科 3年

③ツバルでの生活で私がツバルを見、聞き、感じ、味わい、触れ、探り、体験することで、私に関心をもつ「ツバルと日本～歴史的観点から～」を十二分に全うするとともに、今を生きるみなが重要視する環境の真の現状を知り、埋没しつつある同問題にこれからの環境問題として新たな一面を植え付け、主に同世代に訴えていけたらと思う。最後に個人的参謀を一言。「なんでもできそうで実はできない世の中で、何にも捕らわれず一個の生体として一夏を生きてみたい。」



①綱島 祥三 (22) 渉外

②国際文化学部人間科学科心理学専攻 4年

③昨夏の現地視察の際、ほんの少しだけツバルの様子を見てきたのですが、ツバルという国への憧れと興味は以前と変わらないどころか、「本当に消えてしまうかもしれないこの島々に確かに暮らしている人たちの日常をいつまでも記憶に留めておきたい」という思いがますます強められて帰ってきました。五感をフル活用して得たツバルの日常の様子が、聴き手の驚愕を呼ぶことを願っています。



①黒川 圭太 (21) 広報・記録・会計

②理学部環境理学科 4年

③『南の島』に悪いイメージを持っている人がどれだけいるだろう？『環境問題』と聞いて耳を傾ける人は？ここ日本ではどちらも多くはないと思う。自分にとってメリットにならないことに注目してもらうことは難しいと思うが、『南の島ツバル』を通じて、その青く透き通った海や南国の空気と同じように、環境問題も心に受け入れてもらいたい。そして、この計画を環境問題改善のきっかけに、人の心を変えるきっかけにしたい。



①魚住 直未 (20) 広報・記録

②商学部経営学科 3年

③世界にはさまざまな人が多様に暮らしていて、当然もめごとはあちこちに散らばっている。けれど『知る』『感じる』ことで、もめごとは解決に近づくのではないだろうか。だから遠い土地の人を身近に感じるのはとても大切なこと。けど実際そんな報道は多くない。

今回ツバルに行って、感じて、まるごと伝えて、メッセージの受け手がツバルの人に親しんで思いやれるようになったら…環境問題、ちょっとマシになれば、最高だよ！！



①小此木 朋子 (20) 医療

②商学部経営学科 3年

③ツバルという国をこの計画の前から知っていた、赤井秀和がツバルを訪問していたTV番組を偶然見たのだ。調べてゆくほど、環境問題は他人事ではないと気がつかされる。周りの人に私達の調査報告を頭の片隅に置いておいてもらい、なにかのきっかけでツバルと

いう国の存在を思い出してもらい、環境問題を意識してほしい。



①讃岐 友子 (20) 広報

②国際文化学部国際関係学科 3年

③どこかで聞いたことのあるツバルという島。ツバルではこどもたちと過ごしたいなあ。日本とは全く異なる生活環境のなかで彼等はどうなことを思っているのか。日本のこどもたちの価値観、世界観との違いがあるのだろうか。わたしには見えなかったものをみているのだろうか。少年たちが集い生活する学校で、彼等と同じ授業を受け、放課後はビーチに駆け出し同じクラスのナントカ君にときめいて青春を謳歌するのだ。



①今井 美津子 (19) 通信・医療

②国際文化学部日本アジア文化学科 2年

③私がこのツバル計画に参加することを決めたのは2003年11月だ。それまでは行きたい気持ちはあっても、踏み切れなかった。なぜ、参加を決めたのか。それは、私の中で「何かしたい」という気持ちが大きくなっていったからだ。大学生活は短い。その中で、できるだけ

だけのことをやりたい。それが、私を参加に踏み切らせた。ツバルでは色々なことを見、聴き、ツバルをまるごと感じてこようと思う。・・・一回り成長した自分になる！！



①野澤 昌勝 (19) 装備

②商学部経営学科 2年

③ツバルってどこですか〜と聞かれたら、僕は「南国」と答えます。

探検部がなぜツバルに行くの〜と聞かれたら、僕は「ツバルを探查」と答えます。

探検のフィールドは山、海、ジャングルのみならず、街中や海外の問題まで幅広い。

テーマに沿って、知らないことを知り、アタックすることが僕にとっての探検だから。